



TITLE:

花山の日食前後 (日食報告號)

AUTHOR(S):

佐登兒

CITATION:

佐登兒. 花山の日食前後 (日食報告號). 天界 1936, 16(184): 403-403

ISSUE DATE:

1936-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167271>

RIGHT:

花 山 の 日 食 前 後

6月19日の日食當日を目前にして、花山の留守隊は各観測地よりの力強い通信を受けて、心より諸氏が天候に恵まれて、日章旗が高くシベリヤに、満洲に、北海道に高く揚げられる事のみ欣求した。梅雨期にも關はらず連日の快晴を喜んだものの、天氣が幾分下り坂となつた爲、反つて當日の天候が氣がかりとなつて來た。毎朝ラヂオや新聞を通して、北海道の各観測地の天候に集中されたが、シベリヤと満洲とは天候は前から確實だと聞いてゐたものの、全然譯らないのが残念だつた。19日は來た！天文臺下の掲示板には大きく參觀禁止のビラが貼り出された。素晴らしい好天氣！各観測地の天候も斯くあれかしと叫ばざるを得なかつた。皆既線下は勿論、本會及び其他のアマチュア連の活躍がパノラマの如く展開して來る。女満別より北海道各地の緊張振りが正午より放送される。北海道は概して天氣、満洲は快晴の報は力強く感じたが、シベリヤ一體は曇天とのニュースは留守隊の心を強く曇らせた。ドームを開いて、汗ダクダクで30cmのCookeを通して、投影板上に初虧を待つ。投影板に急に月の影が黒點となつて現はれる。初虧だ！残念な事にはクロノメタ其他正確な時計は全部各観測地へ出動してゐる爲、正確な初虧のタイムを計りえない事だつた。電話がシキリとかゝる。

月の影は進んで、食分7分2厘となつた。太陽の光そのものには變化は殆んど認められなかつたが、東山や山科平野の色彩が相當變化を示した。

夕立後にサツ照りつけた太陽の光を感じた。土の色彩もすべてやゝ赤く染まつて何とも形容出来ない氣分に包まれた。早くも復圓終り、待望の日食は終りを告げた。快晴に恵まれた各観測地よりの快報を今か々々と待ち望む。先づ16時30分中頃別よりの快報に亞いで、遠輕、枝幸、オムスク、呼瑪と連續して山科郵便局より電報が読み上げられる。全部大成功を収め得た事を知つた留守隊は、一齊に祝杯こそあげなかつたか快哉を叫んだ事だつた。斯くて花山各観測隊が各自のえがたい體驗談と共に、珍談奇談の土産を、タツブリともつて歸臺する日を留守隊は童兒の如く毎日待ち望んだ事も悦ばしい光景である。—(佐登兒)—